

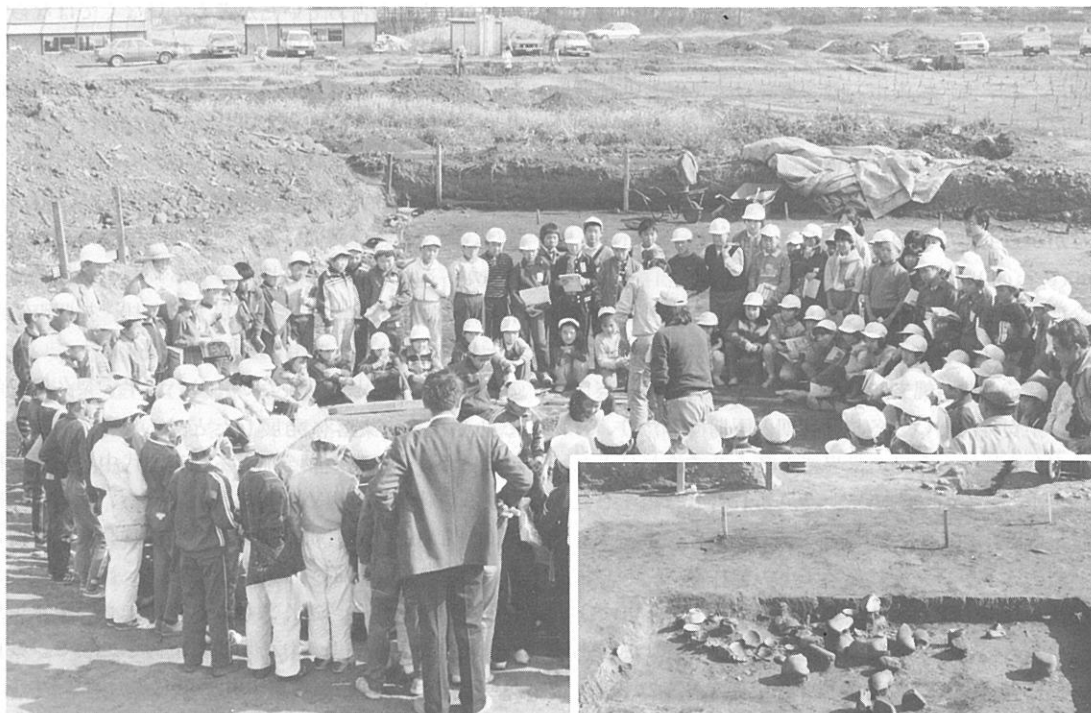
長野県埋蔵文化財センター

No. 12

1985. 3. 10

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩 筑 調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



現地説明会

中央道長野線

吉田川西遺跡

写真上 現地説明会

右下 第5号住居址

調査研究員 原 明 芳

吉田川西遺跡は、昭和59年11月30日まで調査を行い、多数の平安時代の住居址を調査することができた。そのまとの意味も含めて、主に吉田地区の人々を対象として、12月9日(日)に、現地説明会を行った。当初の予定では 午前1回、午後1回説明を行う予定であったが、見学者が多数であったため、午前2回、午後1回説明を行った。また、出土遺物の展示を1日通して行い、調査研究員が説明をした。このほか、「掘りだされた昔の吉田」というパンフレットも作成し、全員に配布した。新聞等で取り上げられていたた

め、とても関心が高く、地元の方々のほか、研究者も多数見学にみえ、最終的には300名ほどとなり、盛況のうちに終わることができた。

このほか、11月中旬には地元吉田小学校の児童が、社会科の授業の一環として、1年生から6年生までが見学に来た。児童たちは、教科書だけの学習と異なり、実際に手で遺物にふれることができ、大喜びであった。

このような現地説明会、見学会を発掘調査への、理解を深めてもらうために行ってみて、日常の普及活動の大切さを強く感じた。



昭和59年度

埋文センター 発掘調査及び普及活動のまとめ

A 調査第1部 発掘調査について

埋文センター調査部

昭和59年度は、一昨年から実施してきた中央道長野線岡谷市内遺跡の調査が完了し、塩尻・松本両市においても11遺跡の調査に着手し、うち吉田川西（塩尻市）・神戸・上二子（松本市）の3遺跡は来年度も継続調査となった。

今年度調査が行われた遺跡の成果については、埋蔵文化財ニュースのNo.11に記載したが、諸成果を概観するなかから主要な課題を提示してみたい。

今回調査した中島B・大洞・中島A・吉田川西の諸遺跡は、それぞれ先土器時代～縄文時代草創期・縄文時代前期～中期・縄文時代晩期～弥生時代中期・奈良時代・平安時代という各時代時期の画期にあたり、特に中島B遺跡は、今日の学界でも多くの議論がなされている土器・石器類が出土した。これらは、出土した層位・遺構との関連を考慮することはむろんであるが、原材料の入手から完成に至るまでの製作過程、さらには使用の状況・廃棄された様子を一連のものとしてとらえられるので、より厳密な型式検討を要するであろう。また大洞遺跡の石製垂飾、中島A遺跡の土偶・装身具等の信仰遺物、樋口・吉田川西両遺跡の刀子・紡錘車・鎌・鉄鏃等の生産遺物も、単なる個体の研究に留まることなく、広い視野で見ることが大切となる。

遺物と共に発掘された遺構は、多くの問題を提供してくれている。中島B遺跡のブロック1は、石器群の状態や接合された資料から石器製作址と考えられ、大洞・膳棚B（白山）遺跡の住居跡は巧みな構築方法によって、急斜面の不利な地形をみごとに克服してしている。さらに吉田川西遺跡では、同時期の住居址が接近して建てられており、これら数棟を一群としてみることもできるであろう。時代によって、それぞれの環境を利用して居住しているが、それに加えて、大洞遺跡の土壇・集石炉・黒曜石のブロック、塩尻市大原遺跡の土壇（以上縄文時代）、中島A遺跡の石組み遺構（弥生時代中期）、大洞・膳棚B（白山）両遺跡の石組み墓（奈良～平安時代）、吉田川西遺跡の土壇（平安時代）は、遺跡の性格を解明するためにも欠くことのできない資料となるであろう。

これらの遺跡は、周辺の諸遺跡との係りの中で、どのような位置を占めていたか考えて見なくてはならない。中島B遺跡は扇状地に形成されたわずかな微高地上に位置している。この時期の遺跡は山間丘陵地に位置するという従来の認識を破るような存在は、今後の立地研究に一つの示唆を与えるものと思われる。縄文時代前期から中期に位置する大洞・膳棚B（白山）遺跡は、わざわざ急斜面あるいはやせ尾根に立地しているが、これと同様の立地をみせる岡谷市月見ヶ丘・下り林・間下丸山・ウツ木・堤上・西林・神明町遺跡等と共にいわゆる高地性小規模遺跡群を形成している。これらが、さほど時期をたがえない扇平・梨久保遺跡に見られる大集落に発展したと見るならば、当地方において、らん熟の度を加える縄文時代中期文化を把握する意味からも極めて興味深い。また、大洞・膳棚B（白山）遺跡の石組み墓は、大久保B遺跡の事例とあわせ、後に山を負い左右に丘陵をもち、前面が開き、眼下に平地を臨み、遠く諏訪湖を眺望でき、風水思想に合致したように思われる場所に位置している。奈良から平安時代に位置する吉田川西遺跡は、塩尻市平出・高出・吉田向井、松本市下神・南栗遺跡と並び大集落を形成している。他方で塩尻市舅屋敷・高田・内田原遺跡の中規模集落や八窪・栗木沢・ヨケ・樋口等の小集落の存在は、人口の増加、それに伴う耕地の拡大などが考えられ、倭名類聚抄に見る良田・宗賀・大井の郷などの配置となり、松本に国府が移転してから国府周辺が急速に充実発展するにつれて、郷もまた発展したであろうし、駅路・交通路の発達に伴いめざましい開発もあり、遺跡を考える上でさまざまな問題を含んでいる。更に青木沢東・大原遺跡のように遺構があまり検出されなかったにもかかわらず、遺物の出土がみられたことについても、遺跡の性格を規定するため決して無視できるものではない。

こうした考古学的諸成果に加え、¹⁴C年代測定（中島A・B遺跡）、X線分析（吉田川西遺跡の鉄器）などを行いながら、今後の報告書作成、及び次年度調査を進めていく中で、関連諸科学から得たデータを有効に活用していく必要がある。

（調査第一部長 河西 清光）

B 調査第2部 普及活動について

1 現地説明会・展示会

中央道長野線岡谷地区遺跡出土品展

昭和59年11月29日～12月2日 市立岡谷美術考古館と共催で実施しました。

昭和57年度から3年間にわたって発掘調査した岡谷市内10遺跡での出土品を中心に、大久保B遺跡の「瑞雲双鸞八花鏡」をはじめ多数の土器・石器類を時代順に説明を付け展示しました。

「土器バズル」・「火起し」・「石器作り」の体験・実演コーナーも設定、小中学生に人気がありました。

各遺跡の旧地形並びに発掘調査の様子を撮影したスライド映写も行い好評でした。

3日間で、岡谷市を中心に県下から研究者をはじめ幼児お年寄りまで幅広く1,112人の入場者を数える盛況でした。

市立岡谷美術考古館には、展示場の提供や展示指導



岡谷地区遺跡出土品展示風景

発掘調査紹介

県内各地の調査状況

— 佐久市 戸坂遺跡 —

佐久市教育委員会 小山 岳夫

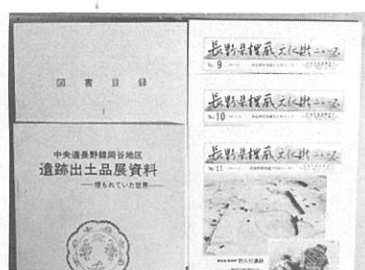
戸坂遺跡は佐久市新子田に所在し、三井産業の採土工事に伴い、昭和59年8月6日～9月11日にわたって緊急調査された。

遺跡は、滑津川の支流志賀川北岸の標高710m内外の台地上に立地している。この台地の縁辺部は、戦国時

及び入場料の無料措置を講じるなど多大な御協力をいただき大変感謝しております。

中島B遺跡現地説明会兼展示会

59年度 出版物



昭和59年7月22・29日と2回にわたって、現場での説明会並びにプレハブ現地事務所で出土遺物の展示会を実施しました。見学者は、岡谷市内を中心に県内外から熱心な研究者をはじめ関心のある市民小中学生まで120名でした。

吉田川西遺跡現地説明会兼展示会 扉頁参照

その他各発掘調査遺跡では、調査成果の報告会展示会を実施しました。

2 刊行物等について

「埋文ニュースNo.9～12」の発行、「図書目録Ⅰ」の発刊、「中央道長野線岡谷地区遺跡出土品展資料」の作成等を行い、現在、「長野県埋蔵文化財センター年報1984」・「長野県埋蔵文化財センター要覧」の発行に向けてセンター全員で努力中です。

昭和59年度当埋文センターの発掘調査並びに普及活動ともにおおむね順調にできました。これもひとえに、行政機関をはじめ関係機関、地域社会の方々等の深い御理解と御協力によるものと感謝申し上げます。

(調査第二部長 春原 正毅)

代末期の干拓以前まで、湖に面していたため、著しい侵食をうけ、切り立った崖を形成している。

昭和46年に、今回の調査区から東側へ約100m程離れた地点で第1次調査が行われ、平安時代の竪穴住居址4軒が検出されている。

今回の調査で検出された主な遺構の内訳は、次のとおりである。

縄文時代中期後半	竪穴住居址2
弥生時代後期	円形周溝遺構1 溝状遺構1 特殊遺構2 土壇1
平安時代	竪穴住居址3
中世	土塁跡1

縄文時代の遺構は、佐久市内の平坦部では、比較的僅少な例といえ、本遺跡の2軒の住居址は、好資料を提示したと言えよう。

弥生時代の遺構は、すべて後期に比定され、最も注目



円形周溝遺構

されるのが、検出長約 40 m、巾 1.5 ~ 2.4 m、深さ 1 m 内外を計測する断面V字状の円形周溝遺構である。未調査区にまでかかるため、その全容は明らかでないが、全体像は直径 60 m 前後の円形を呈すると考えられる。溝内からは、弥生時代後期の壺・小形壺・深鉢・甕・小形甕・高坏など完形品が多量に検出されている。この中には、甕を棺身に、赤彩された高坏の坏部を蓋に利用した「蓋付甕棺」に使用されたものもある。甕棺は、正位の状態で検出され、内部は骨粉と考えられる白い粒子が、底面に極少量認められた以外は、ほぼ空洞に近い状態であった。

平安時代の住居址は、3 軒いずれも 10 世紀前後に比定される。カマドもすべて北壁の中央にあり、残存状態が極めて良好な「石組み」カマドもみられた。遺物は、土師器・須恵器の良好なセットが豊富に検出されており、「王一」と墨書された土師器もみられる。

戸坂遺跡は、以前から莫大な量の既出資料が発見されており、滑津川流域有数の大遺跡として著名であったが、今回の調査によって、その実態の一端が学術的に明らかにされた意義は大きい。その意味でも円形周溝遺構の性格及び、第 1 次調査の資料とあわせた墨書土器の分析は、特に重要である。

追記 本遺跡で最も注目を集めた円形周溝遺構については、当初、新聞紙上で周溝墓と発表されたが、規模・溝の断面形など疑問点が多いため、明確な位置づけは、未調査区の確認調査を行い、全容が明らかになった後、再検討することとしたい。



溝内の蓋付甕棺

長野市 更埴市 土口將軍塚古墳

調査主任 小林 秀夫

1 土口將軍塚の位置と調査の経過

長野市松代町岩野と更埴市雨宮土口との境界線上に位置する。千曲川の東岸、妻女山から千曲川にそって突出する長い尾根の末端近く、標高 450 m の地点に立地している。善光寺平に分布する前方後円墳のうちでは最も墳形がよく遺存していることで知られていた。

昭和 56 年春、墳丘北側の後円部からくびれ部にかけて埴輪列が盗掘される事件があり、その保存対策の必要性が指摘され、長野市教育委員会と更埴市教育委員会は合同で調査委員会を発足させた。米山一政先生を団長に、昭和 57 年度を初年度として、本年度で 3 年目である。60 年度にも調査を予定している。

2 調査

調査は、第 1 年度 (57 年度) では、調査方法や範囲を確定するために、後円部中央にトレンチを入れ、葺石の存在や、埴輪の出土状況、内部主体の存在、性格の把握を目的とした。第 2 年度は、内部主体の検出を行い、2 基並列した竪穴式石室と、鉄鍬、鎧の残欠、鋳の一部など副葬品がみつかった。また第 2 年度の 3 月、第 3 次調査として、前方部の内部主体の存否、前方部の葺石の状況の調査を行った。第 3 年度は、墳丘の全長、前方部葺石の配列、埴輪列の検出を目的とし、調査の結果埴輪列を確認し、また前方部の葺石、コーナーなどの状況、後円部の葺石を確かめ、墳丘の全長を把握した。

墳 丘 全長 72 m、後円部 30 m、前方部幅 26 m、後円部高 5 m、前方部高 4.5 m の前方後円墳で、善光寺平に分布するうちでは、第 4 位の規模を持っている。ほぼ全面に 2 段にわたり葺石がみられる。狭い尾根上に立地する古墳で、墳丘の構造にもかなりの工夫をこらしていることが推定され、解明のための調査が必要である。



2 基並列した 竪穴式石室

内部主体 2基並列した竪穴式石室が検出された。

墳丘の長軸方向（東西）に沿って一基は墳丘北側よりに、頭部を西側に寄せたあたりに、もう一方は、長軸線上——墳丘中央から検出された。前者を北石室、後者を南石室と仮称する。両石室ともに原型をとどめないほど破壊されていた。南石室は、全長約5.2m、最大幅0.65m、高さ0.85m、北石室は、東側が失われ全長は不明であるが、幅はやや狭く、0.55mである。安山岩系の板石状の石を小口積みしたものである。床面は粘土を用いた礫床状である。

埴輪列 前方部、後円部の2段目の葺石上と、前方部墳頂部から出土し、次年度は後円部、くびれ部の埴輪の配列を追求の予定である。埴輪は以前から注目されているように、格子目の叩きを有する円筒埴輪が多くその系列の追求が急がれる。

本墳の築造年代は、5世紀後半と考えられる。



円筒埴輪列

駒ヶ根市 小山遺跡

駒ヶ根市教育委員会

市立駒ヶ根博物館学芸員 小原 晃一

小山遺跡は、駒ヶ根市中沢中割に所在し、伊那山地の一角陣馬形山麓の北端部で、天竜川左岸の支流下間川の南岸段丘上（標高670m前後）に占地している。下間川との比高差は20mを測る。

発掘調査は、駒ヶ根下間地区県営は場整備事業に伴い、当該遺跡が破壊される状況を招いたため、昭和59年9月7日から10月26日までの約2か月間にわたり実施した。遺跡面積は約4,000㎡であるが、発掘調査を実施したのはその約30%の範囲である。

調査の進展に伴い、遺跡の上層は中世の遺構及び遺物包含層、下層は縄文中期の遺構及び遺物包含層で複



掘立柱建物址群

合状態であることに加えて、上層の中世遺構が大規模であることが判明し、予算・期間に限界があるので、途中で工事の設計変更を行うこととし、遺跡全面を新水田下に埋没させて保存する措置を講じた。

検出された遺構は、15世紀初頭から16世紀初頭にかけての切妻造りと思われる掘立柱建物址群（単独ほぼ完形2棟、単独不完形3棟、重複8棟以上、重複不完形15棟）、土塁跡と考えられる集石列址1条2か所、集石址5基、池泉とも考えられる配石群1か所、縄文時代中期前半の配石群1か所、土壇1基、ロームマウンド1基である。中世の遺構は集石列址が南側の山麓に面して配され、掘立柱建物址群、配石群等を取り囲む形態をなしている。

集石列址は、幅1.2m～1.5m、高さ40cm、長さ28mにわたって検出され、ほぼ東西軸に平行するものの、大石3個を配した門址と考えられる地点よりやや東側で北東に折れている。掘立柱建物址のうち、ほぼ完全に近い第1号址は、梁間2間、桁行3間の規模をもつ。他の単独及び重複する建物址は、2間×3間、3間×4間の規模で、中には廊下をもつと考えられるものもある。特に、重複する建物址の判別には困難を極めたが、最低8回以上の建替えが推定される。

遺物については、総数で1,000点に満たないが、各遺構に伴い、内耳土器、古瀬戸灰釉後期所産の四耳壺、茶碗、平碗、折縁深皿、播鉢、卸皿、緑釉小皿、古期天目茶碗等の陶器に加えて鉄鏃、刃子、砥石など多種類のほか、縄文時代早期から中期後半にかけての土器・石器片等も出土した。特に古瀬戸灰釉四耳壺は4個体もあり、又播鉢は播目が磨滅したものもみられ、居住・生活の長さを物語っている。

以上の様相から、本遺跡の規模は、4,000㎡の全面に展開することは確実で、「方形状の土塁」に囲まれた掘立柱建物址群、「池泉」址等は、室町時代初期における地頭クラスの豪族の居館址と考えられる。

市町村だより (7)

中野市における埋蔵文化財保護行政の現状

中野市教育委員会社会教育課 小野沢 捷

当市における文化財担当職員は、昭和56年に開館した歴史民俗資料館と59年にこの資料館に隣接して文化財として移転復元した中野小学校旧校舎の管理運営との兼務で、資料館に事務室を置き係長と学芸員の2名が担当している。

資料館は開館当時事務嘱託1名で管理していたが、管理上の問題と事務合理化により、57年度から文化財係は資料館展示・事業活動と深い係りをもつことから兼務となったものである。出土遺物は資料館で保管し、展示室200㎡のうち3分の1は考古資料展示されていて、来館者との接触からみても組織成果は十分あがっている。ただし資料館では年数回の展示替えを常としており労力的に対応しきれないこと、社会教育課の管轄で事務処理決裁のため庁舎（約1.5km）まで出向かなければならない等の問題がある。

奥信濃の中核都市として発展する当市は、念願の4万市民を達成し今は5万都市をめざしての都市づくりが始まっている。田園都市から今や商工業との調和のある街づくりであり、大型開発事業がいくつか進められてきた。農業基盤整備をはじめ住宅団地、工場団地等の造成、個人住宅は郊外に延びエノキダケ栽培施設等の新增築も盛んで連年緊急発掘調査に追われてきた。

59年をみても5月七瀬遺跡（畑深耕）、6～8月宮反遺跡（建設省委託）、9～10月立ヶ花城跡（中部電力委託）、11月桜沢4号古墳（同）と並行して中原窯

址（畑深耕）、この間いくつかの試掘や立会調査というように現場作業の連続で、12月に入ってようやく整理作業を始めた状況である。

更に、今後は関越高速自動車道上越線、上越新幹線が当市を通過する予定であり、自動車道ではインターチェンジが設置されることから、これに関連する事業がすでに計画されつつある。市内には120を超える遺跡があるので、今後は一層発掘調査が増えることは間違いない。

当市は幸いなことに発掘調査を担当できる学識者が多いことで、日本考古学协会会员だけでも5名おり積極的な協力を得ている。学芸員も考古学専攻で調査団編成が円滑に組めることは何と云っても心強い。大げさではなく家業をもちえりみず調査に専心いただいている調査員が何人かおり、これだけ多い発掘調査を支えている大きな原動力であるとともに、又、文化財保護行政に対し度々鋭い指摘と助言を受けている。

今迄はこのように調査員の積極的な協力により対処してきたが、予想される今後増大する発掘調査には対応しきれないものがある。発掘時期の調整をはかりながら、教員がより参加できるような条件整備ができないものであろうか。

埋文保護上、大型開発事業の方は事前協議が円滑にすすみ経費負担等の問題も少ないけれど、今大きな課題として大型機具による深耕の問題がある。

57年の姥ヶ沢遺跡、59年の七瀬遺跡、中原窯址いずれも大型農機具の深耕によって発見されたものであり遺跡の破壊となっている。果樹の更新による抜根で破壊につながるケースもあると思われる。これら農作業は手軽にできるだけ作業終了後に発見したり、周知の遺跡範囲内であっても保護のための事前徹底策は極めて困難な状況にある。市民の文化財保護思想高揚につとめることは勿論としても、早急に検討しなければならない課題である。

開発事業と埋文の円滑な調整をはかるため、60年度において遺跡詳細分布調査を計画し、より遺跡範囲を明確にして市民、事業者への徹底をはかっていきたい。



59年度実施の桜沢4号墳発掘調査

研修内容報告

遺跡保存整備課程

調査研究員 鈴木 道穂

現在、都市計画などによる遺跡の緊急発掘が日本各地で行われている。遺跡保存には、いろいろ方法はあるが、最も多用されるのは記録保存である。というよりもそうになってしまうという状態である。しかしその記録保存の全てである報告書でさえ、発行部数を制限される現状の中で、史跡指定を受け保存整備をするとなれば、更に数多くの困難な点がある。今回の研修では、このような体制下での遺跡保存及び整備について、その方法・手順を遺跡の性格別に講義を受けた。

研修期間は、昭和59年9月18日から10月4日まで17日間であった。前半は、古墳、城郭跡、集落跡、寺院跡、中世館跡、庭園、建物復原、町並保存、遺跡の保存科学等の講義を受け、後半は、飛鳥・藤原地域、百済寺跡、田能遺跡・五色塚古墳・難波宮跡の整備例見学と、北海道ポー川流域、沖縄グスク跡の整備例の紹介、整備材料の講義、「遺跡整備の現状と課題」と題しての検討会、最後は、各自モデル遺跡を使って設計実習を行った。

ここでは、古墳を取り上げ保存整備するについての留意点等、講義内容を基に伝達したい。

古墳は、城郭と同じくほぼ全国に分布し、史跡指定を受けている例が多い。しかし、保存されているも、整備が進められている例は少ない。

最初に企画段階における留意点を2つ挙げる。1つは、歴史資料・考古資料つまり歴史遺産としての整備であり、もう1つは、お墓としてイメージを持った整備である。この2条件を前提にして次に実際整備上の問題点を考えてみたい。

まず、墳丘について考えてみる。墳丘には葺石がある場合とない場合がある。いずれも整備後の雑草処理等管理面で問題がある。葺石がある場合は、三和土・ソイルセメント等使い、練り積みにする。葺石がない場合は、芝を張ったり三和土・ソイルセメントで墳丘を覆うなどが解決方法の1つである。次に墳丘上にある

樹木の取り扱いがある。ほとんどの古墳は、墳丘上に樹木があり、周囲との景観を調和させるために手を煩わせる問題でもある。福岡県八女市岩戸山古墳のように立木のみ見えるようにし、墳形の展望を考慮した整備は、成功例である。しかし、往々にしてある墳丘上の樹令何百年にもなる立派な木についてはどうしたらよいのだろうか。そのような木が及ぼす影響について考えてみる。第1に斜面上にある大木は倒れやすい。そしてその根は、石室の石を抱き込んでいることが多い。当然木が倒れる際には、石も移動してしまう。また、根はその回りに空間を作り、そこから水分と共に土を石室内に持ちこんでしまう。以上のような影響を考えると、許可さえ得られるなら、そのような樹木は取り除く方がよい。

周濠については、実際に水を入れ立体的に表現する場合と、水を入れずに砂等を入れ平面的に表現する場合がある。どちらがすぐれているかは、一長一短であるが、これは墳丘に登らせるか、周濠を渡らせるかという利用形態とあわせて考えなければならない。

石室主体部は、まず崩壊部分を修理するが、公開技法や装飾古墳等の石壁・石棺の維持管理も整備上重要である。多くの公開技法は、墳丘をコンクリートで変貌させた入口を設置する直接的な方法をとっているが、墓の神秘的な部分を重視し、墳丘の原形を留めるなら、むしろ墳丘から距離をおいた所に入口施設を設け、そこから地下道等にて石室主体部へ入る間接的な方法を考えたい。装飾古墳の維持管理は、エアーコンディション等のために、石室よりも大きな機械室が必要になり、金銭的にも高額である。解決策は、検討する必要がある。

古墳整備について問題点の羅列になってしまったが、最後に、研修に参加し遺跡保存整備について自分なりに感じたことを述べてみたい。

整備をすることは、公開され国民に利用されてはじめて「整備」となるが、実際問題として時間的には長期間になり、財政的にも多額になる。だから単独事業としての実現が困難になり、都市計画構想等とのタイアップによって整備事業計画が現実的になる。そこには新たに行政的な問題も現われ、我々は戸惑いを感じて、奈文研のこのような研修に参加するのだろうか。事実、今回の参加者の半数以上が、直面した問題を抱いた者であった。行政と切り離せない現状では、遺跡の保存整備とは遺跡の活用ということになるのだろうか。

埋文施設紹介 (10)



穂高町郷土資料館

〔建物の概要〕 穂高町郷土資料館は、町内4小学校に収集保管されていた民俗・歴史・考古資料の、小学校統廃合に伴う散逸を防ぎ、適正保存・公開普及を図るため、昭和47年4月28日に開館した。建物は鉄筋コンクリート2階建て、延面積457.25㎡である。

〔展示〕 昭和39年より実施された古墳詳細分布調査によると、有明古墳群・西穂高古墳群・上原古墳等総計65基に及び、古墳時代後期の円墳で、上原古墳の竪穴式を除き横穴式石室のものである。ほとんどは、盗掘されていた。これらのうち、現在までに発掘調査等を行った 祖父ヶ塚（中房左岸）、陵塚・犬養塚（A16）、金掘塚・祝塚（B5・23）、三郎塚・狐塚1号・同2号（E7・8・9）、F1号（塚原）、G1号（上原）の出土品は、当館をはじめ、穂高神社資料館・有明神社宝蔵・宮内庁書陵部・東京国立博物館にも保管収蔵されている。特に当館は上原古墳出土の勾玉・管玉・切子玉・小玉・金環・轡一式・杏葉・直刀・辻金具・飾金具・刀子・須恵器を一括展示しており、当古墳の性格の一端を窺うことができる。いっぽう、昭和



離山遺跡出土の土偶頭部

46年に3次にわたる発掘調査が実施された離山遺跡（現在穂高カントリークラブ）では縄文時代後・晩期の配石遺構や住居跡が検出された。

当館では、発掘地点や発掘状況、更に遺構写真パネルで示し、該期土器をはじめ石器・土製品・石製品を分類展示している。これら考古資料は、時間的連続性を欠くとはいえ、各時代に当地方で暮らした先人の姿を雄弁に物語ってくれる。

こうした時代から下り現代に至るまで、庶民の生活を支えた道具類は、民俗展示にまとめられている。以下それらを列挙してみよう。

- ・農具 稲作に関わる苗代→本田整地→田植→除草→落水→収穫→調整の用具、山葵栽培用具
- ・漁具 鯉仔・鮭・淡水魚に関する用具
- ・養蚕具等 山蚕の種付用紙切用具や製糸用具、機織・糸車や製品
- ・日常生活 おえの間（お勝手）を復元したジオラマ展示（4体の人形・家財道具・生活・信仰用具）や明治～昭和初期の飲食器
- ・祭礼具 穂高神社のお舟祭や遷宮祭に使う穂高人形の頭の展示

なお、資料の収集にあたり、穂高町内で作られたものか、町外で製作されても町内の人々によって使われたものに限ることを基本条件とした。

所在地 穂高町大字有明7327 松尾寺山公園

連絡先 穂高町教育委員会 0263-82-5970

休館日 月曜日・祝日の翌日 12月29日～1月3日

入館料大人（高校生以上）100円 小人50円

団体20名以上1割引

50名以上2割引他

交通 車で有明駅から10分、穂高駅から15分程度

備考 公園内には本館と共に、重要文化財松尾寺薬師堂や「鐘の鳴る丘」集会所がある。



埋文センターから

59年12月9日 吉田川西遺跡現地説明会

60年1月23日 県教委事務局との懇談

埋文ニュースNo.12は、本年度分の最終号です。

本年度公私共に御多忙のなか、御寄稿くださった各位に心からお礼申し上げます。また、本埋文ニュース発行に当たり御指導御協力を賜りました方々に、厚く感謝を申し上げます。来年度も一層の御支援御協力をお願いいたします。